

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

一九八一年のデータによると沖縄のヒバクシャの数(「被爆者手帳」を所持している人の数)は、広島、長崎など特別な県を除く他県と大差はなく三五九人となっている。この数字を見れば、かぎり何の変哲もないように思われるが、沖縄の歴史の中でこれを考えると、本土のヒバクシャとは大変なちがいが浮かび上がって来るのである。ここに私の親しくしている沖縄のヒバクシャがいる。かりにBさんと呼ぼう。Bさんは大戦中の一九四三年四月に長崎に渡航し三菱造船所に勤務していた一九四五年八月九日被爆した。その日から爆心地附近の死体処理にあたり、かなりの量の残留放射能を浴びたものと思われる。

敗戦直後は誰も沖縄の郷里へは直ちには帰れず、Bさんも翌年の十一月ようやく帰郷することが出来た。その間、長崎の焼跡で寝起きする家もないようなくらして、港灣の積荷作業や、木材運搬、船乗りなどの仕事に何とかありつき、生きるのに精一杯であった。そ

して沖縄へ帰郷してみると、すさまじい地上戦の跡の荒廃と混乱の中、米軍の占領下にあり、まともな職とてなく、多くの県民がそうであったように、屈辱を感じながらも米軍基地労働者として働かざるを得なかった。カーペンター、一般労務、マリン消防隊などとして基地で働き一九八八年退職した。しかし、その頃から胃腸の不調を訴えるようになったが病院へ行くことはためらっていた。私はBさんに早く入院するようにすすめ、やっと重い腰を上げて大病院へ入院し、大手術を受けた。幸いに手術は成功し、無事退院した。

オキナワ・ヒバクシャ多重苦の訴え 武居 洋

土へ渡航、原爆の洗礼を受け、やっとの思いで帰郷してみると郷里は焼土と化し、戦後の荒廃と米軍統治の下で屈辱を感じながらもヒバクシャはタブー視され、周囲からは忌み嫌われた。ともに被爆した肉身や同僚の不明の死に出会い、死への不安を抱く。病と貧困の悪循環の中で辛うじてくらしを立てる。

本土では一九五二年講和条約がなり、一九五七年「原爆医療法」、一九六八年「特別措置法」などの救済措置がなされたが、復帰前の沖縄には適用されず、沖縄のヒバクシャは放置され、ハンディを負わされること約二〇年、ヒバクシャのたたかいはより何となく「準用」をかちとったが全く不十分であった。

このような「施政権分離」による放置責任は重く問われねばならない。沖縄のヒバクシャはこのように辛い多重苦を負わされて来たということが出来る。幸いにしてBさんは健康を回復し、いまも沖縄のヒバクシャのリリーダとして、人間を否定する核戦争をなくし、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニを最後とすることを叫んでたたかっている。国民的な要求となつて「被爆者援護法」制定のために運動している。

(琉球大学医学部教授・沖縄平和の創造委員会事務局代表)



アメリカのワシントン市の高校生たち (7.26)

「死の灰がいまにも降りかかってくるような…」—— 高校生の見学あいつぐ

夏休みと共に、展示館にはノート片手の中学生・高校生が目立つようになり、今年はずっと様子が変わります。レポートを書いたりする夏の「宿題」は同じでも、五、六人のグループになっての見学で、熱心にメモを取り、本を読み、話し合っているのです。東京の田無高校、千葉県船橋高校の高校生たちで、感想文のノートにもたくさん印象が記されました。

「はじめてやってきた。写真や説明は先生から話を聞いていたので理解できたが、船の方へあがって試してみると、なにか得体の知れない恐怖がでてきて背中がぞっとした。私たちはもっと考えなくてはならない。」「夏の課題だと軽くなったものの自分では考えなかつたくらい奥の深さがあり、戦争や、原水爆問題に強い関心を持った。」「なんと書いてよいかわからないくらいだ。核兵器とは何か?」

大石さんの手記、反響広がる

七月十二日に出版された大石又七さんの『死の灰を背負って』は展示館の書籍販売コーナーでも普及が進んでいます。「福竜丸だより」の読者のみなさんからも注文書がつけぎに届いています。大石さんもテレビ・週刊誌の取材などで大忙し。日曜日の朝のニュース番組、教育テレビに出演したり、NHK静岡支局、東京都映画協会などのビデオ撮影があいついで展示館であり、都映画協会の撮影は

人のシドウェルフレンドハイスクールの生徒です。はじめて折ったという大小さまざまな折鶴をレイにして贈り、つぎつぎに質問と感想を述べ合いました。女生徒のたつての希望で普段は入れない船内にも恐る恐る入り、「冒険家になったみたいと思ったが、しばらくすると、死の灰がいまにも降りかかってくるような思いにかられた。」「と、真剣なまなざしで同行の記者のインタビューに答えていました。広島・長崎の原水爆禁止大会に参加しようとする人たちが「第五福竜丸にあってから」とたくさん訪れました。大田区の南部生協の平和を考える会の一行三〇人も、輪になって感想を語り合い、千葉

県習志野の生協のお母さんたちも見学後それぞれパンフレット、書籍を求めて、広島への準備に一生懸命でした。江東区の原水協の代表団は結団式のと展示館を見学、広島・長崎にむかいました。各地の平和集いに福竜丸出航展示館所蔵の展示組写真「忘れ得ぬ船第五福竜丸」(二三枚一組)も、船体の模型と共に、各地に旅立ちました。

七月十二日から三日間、埼玉県上福岡市の公民館で開かれた市と教育委員会主催の「愛と平和のフェスティバル」には、広島原爆資料館からの資料と共に、模型とパネルが、「非核平和宣言都市として市民と共に原水爆の被害を考える」と展示されました。平和コンサート、平和寄席、映画会、平和アピールと多彩な催しのなかで、協会理事の松井康浩弁護士が講演しました。

西宮市役所主催の「原爆展」、広島県高宮町の「平和展」、東京大田区の「平和のための戦争展」にも展示され、堺市歴史資料館、大阪人権歴史資料館の「展示会」には、豊崎博光さんのロングラップの被爆者の写真と共に展示され、反響をよびました。

「広島」「ヒロシマ」④

忘れ物はないですか

清水文裕

「8・6、8・9何の日？」

「広島大生、正解は3割」

のっけからナゾかけめいて恐縮だが、この二行、どんな脈絡があるか、ご理解いただけるだろうか。

六月下旬、中国新聞の社会面に載った記事の見出しである。「1、2年生600人調査」と続く。小学生在対象ならまだしも、大学生しかも被爆地・広島大学での調査というから驚く。総合科学部の小林文男教授が教養課程アジア史の講義でテストをしたもので、広島と長崎が逆になったり、終戦記念日と混同した答えが多かったという。

「広島県外出身者が学生の七割を占め、高校の授業がカリキュラムの都合で現代史まで進まなかったなど理由もあろうが」という小林教授の談話を読みながら、考へ込んでしまった。

しい。だが、もはや「風化」という表現ではとらえようもない深刻な現象が、ゆがんだ知育偏重の風潮の陰でジワジワ広がっているようだ。冒頭の記事を読んだ六日後、今度は「広島生諸君、不作法では!?」と見出しがついた記事が載ったのである。

キャンパス内にある「原爆死者追悼の碑」に腰を掛けて弁当を食べる学生が目立つ、というのだ。たまりかねた大学側は立ち入り禁止の立て札を出したが、追悼碑をベンチ代わりにする学生は一向に減らない。

広島大学のこの二つの事例は、ヒロシマの戦後四六年間の取り組みを根底から問いただしている、と言って過言ではあるまい。反核・平和運動は、生命の尊厳と人類の未来を考へることから出発したはずなのに、いつしか、他人の痛みに思いをはせることすら忘れて

しまったようだ。次の世代に伝えなければならぬ本質を、どこかに置き忘れたのではないか。その当然の帰結として、広島生の事例があるのではないか。

核時代の象徴としてのヒロシマが四六年間のうちに忘れられたものはもつとある。例えばビキニ水爆実験の被災者。一九五七年、原爆医療法制定にあたって法案を審議した衆参両院の社会労働委員会の議事録を読むと、原爆被災者のみならず、水爆実験の被害者に対する立法措置が大きな争点になっていたことがよくわかる。ところが、一年後、被爆者特別措置法案が上程された時には、だれひとりこの問題を取り上げなかった。忘れたと言うより、見捨てたと判断するほうが確かかもしれない。核実験、核兵器製造、ウラン採掘、原発、医療事故などによる核被害が地球規模で頻発したのに、つい最近まで目が向かなかったことと無縁ではないだろう。

西ドイツ(当時)のヴァイツェッカー大統領は一九八五年五月八日ドイツ敗戦四〇周年を迎えて連邦議会で演説し、「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目

となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」と語りかけた。

私たち日本人はこの四六年間、自らの過去を心に刻んできたと胸を張れるだろうか。過去を心に刻む営為を、日本人の共有財産とするための努力を怠らなかつたらどうか。その当然の努力を、かつてわが国が侵略したアジアの国々との関係に生かしてきただろうか。ヒロシマは平和の発信地であり続けることを誓ったが、あの戦争中、「広島」はアジア侵略の出撃拠点であった。だとすれば、原爆を歴史の中でもういちど位置づけ直す作業が必要ではないか。そんな思いをこめて、拙文のタイトルとした。三回書かせていただくことになった。次回は四六周年の「8・6」報告をしたい。

(中国新聞記者)

91・7・20記

〔注〕文中ヴァイツェッカー演説は永井清彦訳『荒野の40年』(岩波ブックレット)から引用させていただいた。

大石さんとの出会い

横山 汪

一九八九年二月八日、修学旅行の事前学習会で、大石さんの被爆体験の講演が急遽実現した。

昭和二十九年三月一日の記憶が、今も消せない……という書き出しではじまる、同年一月十六日付け朝日新聞(夕刊)のシリーズ「昭和」そのときNo.8が、講演実現のきっかけになった。

昭和天皇が亡くなると、マスコミは堰を切ったように、過ぎ行く時代を回顧する特集記事を流した。その中で、同記事「一模型の船に―背負い続ける核の惨禍」という見出しと「船」を手にする大石又七さんの姿が目にとまった。それが最初の出会ひであった。

記事を読み終ると受話器をとおりあげた。住まいが大田区なら世田谷には近いな。とにかくお願いだけはしてみよう。などと勝手なことを考へながら電話番号を問いつけて、「ハイ、丸大クリーニングです」

最初は奥様が出てくださった。

「夜分突然ぶしつけなお願ひをもうしあげ恐縮ですが、貴重な体験を生徒にお話しただけでないので、講演会が実現しないこともありうる。といった失礼なことで承していただいた。その直後、校長はじめ係に連絡をとり、次の日の職員会議で講演会の開催が決定した。会議では思想的な偏向についての疑義が出たが、三日後の打ち合わせでは、大石さんから反対に質問を受けることになった。

「さあ、どうぞおあがりください」と、奥様のあかるく暖かいこと

●大石又七さん『死の灰を背負った』(五頁より)。(五四四名の)文集の中身は意外だった。先生に見せるものだから、建て前だから、といった内容のものではない。：俺のこともずいぶんはつきりと書いてあって、一人で恥ずかしさと

ばではじまった大石さん宅での打ち合わせで、「駒沢大学のイメージからすると、私の話は不向きだと思っていましたがいかがですか」と問われた。「近ごろは、修学旅行というだけで、偏向だ」という向きもあるからね。私は政治勢力とのかわりをもたたくないんです」とも。

私どもの学校では、この二五年来修学旅行のコースには広島・長崎、あるいは沖繩のいずれかを含ませ、平和教育を一つの柱としてきた。特に規定はないが、習わしになっている。

こうしたなか、展示館からは「模型船」やパネルの借りだし、旅行委員生徒の資料作成、寒い体育館用のストープ調達など、講演会の準備は急ピッチに進んだ。

講演会の当日、まず映画「ヒロシマ・ナガサキ」核戦争のもたらすもの(岩波映画)の惨状にどよめきをあげた生徒達は、次の笑いをこらえながら読んだ。本を届けに来てくれたとき、横山先生は言った。「行学一如、これがうちの学校のモットーだしてね」そうか学業も実践も同じ一つのもの。それであのときの便所もピカピカだったのか」

大石さんの訥々としたお話しに深い感銘を受けたように見えた。即刻書いた感想文と、欠席者に読ませようとして起こした講演録を合わせた一五九ページの文集が、それから一カ月後、修学旅行の直前にできあがった。まるで大石さんたちが背負われた厳しい運命に促されるかのような、あわただしい作業だった。

この時の修学旅行の紀行文集は全生徒が寄稿して、五七〇ページ余になった。級友関係・観光へ傾く内容が多いなかで、広島原爆資料館・長崎の国際文化会館、あるいは被爆に関して言及したものが七〇パーセント強。全文を戦争や核問題でうめたものが数名おり、事前学習あるいは大石さんのことを書き加えたものが五パーセント弱であった。

最近、NHKテレビの画面で大石さんにお会いした。チュルノブイリの原発事故に関する問に対して、「いつも知らないものが被害者になる」といっておられた。今後、より多忙になられるだろう。大石さんのご活躍とご家族のご健康を祈るや切である。

(駒沢大学高等学校教諭)